

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和七年十二月作品集

友と巡る唐津 綾乃

学生時代の友が親御さんの体調変化のため実家に戻っていると聞き、唐津まで会いに行きました。福岡から電車に乗り換えると玄海灘が迫り、駅に着けば唐津くんちにむけたお囃子の練習が聞こえました。唐津焼の窯元で絵付けを体験、豊匠秀吉が朝鮮出兵の拠点とした名護屋城跡を歩き、虹の松原で宿泊。呼子鳥賊と地酒「本間」を味わいながら話は弾みました。翌日は呼子朝市と展望船を楽しみ、昔の卒業旅行を思い出しました。

名護屋よりアサギマダラは秋濤へ

名護屋城跡は花野となりけり

黄金の茶室に草の花のなく

秋うら茶碗生まるるたなごころ

烏賊刺しの眼おそろし温め酒

友よりも赤き吾の顔新走

百万の松の息吹や秋の浜

色変へぬ唐津の松をランニング

朝市に寄つて行かんね風さやか

祭笛遠くに聞いて旅終る

《作品鑑賞》

あざみ

久し振りに友と唐津で会われたご様子、唐津市で玄海灘の眺望が素晴らしい名勝地を友と歩かれたご様子や唐津焼の体験、また、秋の夜長をおいしい烏賊刺しで新酒を酌み交わされた様子をユーモラスに表現され、温かい微笑が感じられました。私も旅したことがあるので、懐かしく感じる風景も見え、温かな心がほのぼのと伝わりました。

名護屋城跡は花野となりけり

草花の咲きみだれる野に居て、際限もなく広がる空や玄海灘を眺めていると、なかなかそこを離れられなかったでしょうね。

烏賊刺しの眼おそろし温め酒

生きたまま動いている烏賊の眼がギョロリとして恐かったのでしょうか。でも、食べると身が厚くコリコリし、温め酒がすすんだことでしょう。

朝市に寄つて行かんね風さやか

呼子朝市は日本三大朝市のひとつ。博多弁の「寄って行かんね」の表現もいいし、句に誘い込まれる様でした。

吉備線に寄つては離れ赤とんぼ

頂上や柏黄葉が枝交し

また同じ竜胆を見て下山せり

産卵の頃かと覗く秋の川

曇天に桜紅葉のまた散つて

山腹を鶯の飛び立つ時雨かな

山茶花の一つ二つと寺に咲く

冬日差し鞆を置くによき石よ

冬菊に大山を見る我の影

にほとりの鳴いて癸掬最後の日

大木の高きに声や小鳥来る

色鳥の目の前を飛ぶ川辺かな

背を向けて紋を見するか尉鷲

檀の実見る吾の背にも日の差して

指先でつまんでみたり檀の実

どう行こう団栗あまた散る小道

残照の遠のいてゆく冬初め

川風や落葉時雨の中ゆけば

冬の薔薇美術館へと道いくつ

鳥の声聞こえてゐるたる冬木立

日の差せるうちに済ませる冬支度

今日もまた落葉の道となりけり

枯葦の畑から伸びて大屋根へ

亡き母の編みしコートに手を通す

冬蝶の来てゐる庭の明るさよ

上げ潮に魚のぼり来る冬の川

着ぶくれて息を継ぎ足し上る坂

大根洗ひ自慢してゐる農夫かな

届きたる鳥の蜜柑の甘きかな

年の暮はらから揃ひ誕生会

佐保光俊

高尾ひとみ

あざみ

食べたき物食べて勤労感謝の日

十一月腕の傷痕消えぬまま

踏み歩き湿る落葉は百日紅

鳥声の止めば聞こゆる冬の虫

知らぬ人に挨拶さるる亥の子かな

陸橋を落葉よけつつ歩きたる

陸橋より入線を見る日短

冬晴や木々の間に海見えて

鳥籠に布を被せて暮早し

寒蜩一粒づつの光かな

亜矢

残葉の埃を叩きコート着る

働いて匂を練る夜の冴え冴えと

君去りし棲家に君の石路の花

初雪や我へ一句の舞ひ来ぬか

凍て風の浜を行く子のたどろがず

松葉蟹みしりと動く生け簀かな

とびきりの一枚どれぞ松葉蟹

寒風に漕げばペダルのごいと鳴り

日向ばこ三者面談終へてより

模試近き子へ凛々と湯気立つる

綾乃

行き巡る野辺をちこちに草の花

訪ね来し御堂へ向かひ紅葉散る

新蕎麦を食べて一日を山里に

冬紅葉日の斑移ろふ木立なか

ここからは落葉しきりや八合目

落葉山枝を拾うて杖とせり

落葉踏み山毛櫨の木立の只中に

岩滑る音の細きや冬の氷

湧水を吸んで下るや落葉山

野天湯に浮かぶ落葉を手で掬ひ

井藤希

秋高し街路樹の椰子仰ぎゆく

故郷に帰り味はふ秋鯉

支柱立て小菊楽しむ庭の光

公孫樹散り庭は黄色となりけり

黙々と紅葉踏みゆく通路かな

初しぐれ無花果の葉の散りにけり

紅葉踏む音聞いてゐる夕間暮

山茶花の咲き初むる庭雨の降る

花石路へ荒磯の波打ち寄する

表の戸開けて吹き込む冬の風

霧深き村通り抜け郷に着く

楓黄葉実もあり揺れてまた止まり

学校に子の合唱を聞き秋深し

同世代多き地に住み冬に入る

妹と畠見回ればしぐれけり

いつもこの垣根に生まれ雪ばんば

手鏡に冬の目を受け反射させ

木枯の中を郷へとひた走る

若き隣人我が畑も冬耕す

目覚むれば冬三日月のくつきりと

日かげれば峽はたちまち冬の色

道の辺に枯草焚けば人の寄り

たまさかに人の影ある冬田かな

はらからと久に旅せり冬紅葉

冬霞して吉備の城下の静もれり

飯桐や雲一つなき冬の空

振り返り冬夕焼けのはやも褪せ

また潜る鳩鳥に濠去り難し

ポインセチア匂い果れば暮れてゐし

枯菊を焚く愉しきや山家なる

大畑恵

すみれ

暁子

茶の花のありやなしやの匂かな

旅人と会釈交はして冬木道

公孫樹落葉またその上に落ちてきて

ボール蹴る八手の花の手前まで

花石路の日溜り出でて歩き出す

冬林檎食べ頃問うて椀ぎにけり

犬連れの友に手を振る冬うらら

枯芝に影を落として歩き出す

湯気立てて硝子戸越しに外を見る

今日はどの土手歩こうか冬木の芽

知佳子

故郷で買つて帰るや熟れ石榴

十日ぶりの故郷柚子の黄が目立ち

手の届く柚子だけ我が椀ぎにけり

夫採りし椎茸今朝の味噌汁に

子と二人夫に習うて秋耕す

帰るなり子は干し柿を二つ食ふ

芋煮会夫が火の番してをりぬ

紅葉映ゆる峠を越えて町へ出る

母が家の洗濯竿に大根干す

真白な大根夫が干してをり

ちどり

朝焼や今日一日を生きんとす

竹春や速度を上ぐる新幹線

楠を飛び出して来し鶺鴒かな

柿剥けば子らの小さき頃思ふ

柿の実の大きな種の三つかな

暮の秋ビーグル犬に出会ふ道

冬紅葉夫に見せたき葉を拾ふ

大川の鴨群ごとに流れけり

風に舞ふ落葉の音や人恋し

冬晴やモンマントルの丘想ふ

辻純江

迷ひ道赤蜻蛉についてゆく

待ち侘びて一輪咲ける蘭の花

飾られし匂に領いて秋の午後

芒揺らし一両列車走りたる

今年またせずにをられぬ吊し柿

日を浴びて甘あくなあれ吊し柿

黄葉の続く社に詣りけり

しばらくは公孫樹落葉を踏んでゆく

落葉かな歩き疲れし吾が肩に

退院で賑はふ隣の障子かな

雲雀

リユースの段ボール不揃いの柚子

タキシード描いたケーキクリスマス

年の暮を帯きつく巻いた父

大晦日抜糸の医者はず段着で

年の暮時計回りのロータリー

薩摩芋鍬の傷なし一つ一つ

門松に立てる花村を広げおり

餅米を洗って持ってまた置いて

晦日蕎麦朝から食べる家族なり

学生は、パジャマにダウン除夜の鐘

ふじ女

日の当たるところから葉の紅葉せり

茶封筒にぎんなん宿の女将から

立冬の街を通りて映画館

石路咲いて向うから人杖ついて

山茶花の崩れ諸手で受け止むる

山毛櫸落葉踏んで湧き水汲みにけり

かいつむり二手に分かれ水脈を引く

子は去りぬ侘助を植ゑ三十年

室の花ベッドの母に見ゆるところ

芙蓉枯れ川は変はらず流れをり

松田裕子

早朝の畑で採りたる冬菜かな
庭の葱刻みて盛れる饅飽かな

初時雨貨物列車の長きこと

窓の側針仕事せり冬日和

臥す母の脚を湯婆に乗せやれり

閑け放つガレージの中餅を搗く

セーターに洒落た帽子の初老かな

霜の夜に炭火絶やさぬ厨かな

山々の浮いて見えたり冬霞

初雪に苔むす石の埋もれをり

荒れ庭の空家にたわわ花梨の実
一枚の紅葉を挟む日記帳

団栗を提げて園児の列の過ぐ

背丈ほど撥ねて団栗藪に消ゆ

これよりは城址への道谷紅葉

滑り止め道路に積まれ山粧ふ

今朝の冬賽銭の音響きけり

落葉踏む声はずみをる園児かな

枯芝に引率解かれ園児たち

冬ざるる真夜のサイレンけたたまし

すれ違ひあの人かもと秋の空
真つ直ぐにラジコン上る秋の空

アドレスを探す指先星月夜

椎の実を踏む音のする曲輪かな

立ち枯れの下から上へ月夜茸

上からも横からも撮り黄金茸

手のひらに野葡萄ひとつ乗せにけり

落葉踏み鎖を伝ひ磐座へ

文楽の太棹染みて冬の星

村上正人

森口良樹

秋楡

晩学の一日の暮れて吊し柿

植樹せし根方に添ふる紅葉かな

抽斗の文に紅葉を添へにけり

紅葉の舞うてをるらむ忘れ物

晩学の衿を合はする冬初め

秒針の冬日の中の早さかな

冬の川一億年の石を手に

荷の中の新聞を読む冬日向

寒暁の鴉の羽音大きくて

冬うらら大人になりて絵本買ふ

干したての毛布をかぶりテントとす

スーパ一のカート押したるクリスマス

冬林檎車内のラジオ切り替わり

冬牡丹昔通った定食屋

立駐の薄暗がりや年惜しむ

冬ぬくし景品の重き電車内

椅子高きトルコ料理屋寒椿

寒椿デートの予定を延期して

仕事へと踏み出し見上ぐ秋の雲

広き空刷毛目にも見え秋の雲

昇る月沈むとも見え旅の駅

知るゆえに欠けて見えたる今日の月

残月の見え隠れ進む職場へと

今年また白菊の増え庭の朝

ぐいと切り漬けし花梨が色を増し

花梨の実喉に良いとか言ひながら

船のなき波止場に立ちて冬の海

今井淳子

竹田千絃

なつ

風や遺跡に炭の現れて

肉刺の手に乗せた蜜柑を口に入れ

冬虹の下を通りて奥熊野

冬の虹玉置神社を後にして

前山に寒雷のする満願日

踏む雪の宮の太鼓に消されけり

来てみれば奥津城に立つ枯桜

玉堂の山水掛くる冬座敷

孟徳の詩を吟ずるや冬の風呂

松本卓士

知らぬ鳥鳴いて小春の裏の藪

散歩して裾に枯草付け帰る

冬木道抜けて湖国や波眩し

手袋を唾へて外し鍵開くる

起き抜けに紅茶を淹れて霜の朝

瀬戸の島波絶え間なく去年今年

船溜に波寄せてゐる大旦

あれこれと手元に置いて炬燵入る

冬の梅スケッチブック広げたり

山野ウタ

秋の日の街の本屋で待ち合はせ

二人して漫ろ歩けば木の葉降る

童謡を口ずさみつつ秋の浜

仰ぎ見てたわわな柿よ吹く風よ

冬うらら口紅の色迷ひをり

冬の日やバス待つ吾子の鼻赤し

院内をサンタの踊るクリスマス

年の暮道路工事を迂回して

土肥律子

冬薔薇襖子の像を明るくし

病む友の肩に黄落しきりなり

短日やどと客吐く観光船

小春風岸に両足垂らしをり

厚着して電車の隅に押しやられ

年忘びんごゲームで締め括る

高梨英子

水溜り映るは冬の本立かな

冬枯の草焼く匂ひ風に乗り

冬山の大本伐りし匂かな

歳重ね実家の正月思ひだす

寒紅を差しし昔を懐かしむ

紀英子

切干のふくらむまでの針仕事

古書店の明るく灯り冬の暮

国道のバス停に立つ十二月

失せ物の見つからぬまま冬深し

歳晚の一日海を見てをりぬ

桑門わかこ

川霧に差し込む朝日散り散りに

下鴨や原生林の落葉踏み

ひらがなのクリスマスカード届きたる

顔見世のまねきに推しの名を探し

顔見世のはねて八坂へぶらぶらと

撫子

野路菊や波音絶えぬ土佐の浜

枝先に鴈のはや贅空青し

秋の夜や古備津神社の屋根反りて

落葉せる武家の庭隅マリア像

母恋し形見の石路の咲きたれば

前田範子

冬空に鷺の一声響きけり

朝日さす信号赤の寒さかな

千両と南天赤を競ひ合ひ

捨てられぬ衣出し入れ年の暮

やす保

満ち潮の川辺に来たる冬の鳥

見てくれは小さきが蜜柑甘きこと

悴む手遅延列車を待つホーム

上島康子

朝の日の反射してゐる冬の海

冬枯に何を狙ふか鶯一羽

凍る足街灯めがけ吐く紫煙

上條忠

石室に女官の描かれ小春かな

線香の絶えぬ師走や泉岳寺

山茶花の咲き始めたる義士の墓

熊谷ゆり子

秋の暮收骨終へて海を見る

病室のテレビで知るや秋模様

昼休み銀杏拾ふ板場らと

桜陽

吟行を小春の縁に留まりて

着ぶくれて傍目繕ふ老いてまだ

街灯の薨を照らす光牙ゆ

志路猿

木の葉雨子らは大きく手を広げ

本棚に隙間のできて十二月

日向ぼこしてをり母の横に居て

高嶋絹代

時雨くる帰路の渋滞抜けたれば

おとうとへL・NEで送る冬夕焼

日の入の時刻刻々冬至かな

民

築山の紅葉水面に揺れてをり

行く秋や友と二人の美術館

クリスマス夫と並んでケーキ買ふ

古川廣子

柚子の香やぐつぐつ煮ゆる一人鍋

風止んでしばし山茶花はらはらと

竹藪の雀の先の冬椿

美耶

おもちや屋に喃語決々クリスマス

小さき手でお菓子をくれてクリスマス

ゆつくりとピアノを弾いて冬銀河

山崎桂子

老いの身の日課となりて落景掃く

リフォームの終りし朝の葛湯かな

異国語の飛び交ふ冬の京の旅

和田史子

煮凝りに豆腐を入れて煮直しぬ

無意識に首まで毛布引き寄する

みさ子

いとしさと煮物をつくる冬来る

弥生

令和七年十一月度作品集より

暁子 私の選んだ十句

家並が切れれば比良の秋の風	佐保光俊
星月夜湖の波音聞きながら	高尾ひとみ
小流れに尾を浸しをり鬼やんま	あざみ
訪ぬれば鳶鳴き止まぬ崩れ築	井藤希
一人づつ増えて見上ぐる星月夜	知佳子
月出でて初摺の音続きをり	ちどり
秋深し川に向かひて暮らしをり	辻純江
寒昂歌姫の声澄んでをり	村上正人
ビー玉を透かして仰ぐ秋の空	森口良樹
秋澄むやポストへ落す文の音	今井淳子

ふじ女 私の選んだ十句

コスモスのあたりで途絶え湖の音	佐保光俊
みづうみを色なき風の吹き渡る	高尾ひとみ
石ひとつル―ベで覗く秋の夜	秋楡
裏庭に鴉の落す柿の音	今井淳子
冬めいて棚に積みたるカップ麺	竹田千紘
稽古前道場抜くる秋の風	なつ
夜の明けて白湯ひと口の寒さかな	松本卓士
友もまた白髪まじりや冬薔薇	撫子
お元気と人違ひされ柿売場	桜湯
片手づつピアノを弾いて夜半の秋	山崎桂子